

Title	『終わりよければすべてよし』試論：病いと治療をめぐって
Author(s)	佐野, 隆弥
Citation	Osaka Literary Review. 24 p.49-p.61
Issue Date	1985-12-20
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25532
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『終わりよければすべてよし』 試論

—病いと治療をめぐる—

佐野隆弥

『終わりよければ』と共に「問題喜劇」の片翼を担う『以尺報尺』が、今日の問題を抱え込むが故に近年俄に脚光を浴び始めたのに対し、前者は等閑に付されたままの状態にあり、その「不幸せな喜劇」と呼ばれた肩書きを返上するには到っていない。この理由として、結末の開放性、物語の平板さ、あるいは異種の構成要素の不統一性などが指摘されて来た。だが表面的な物語分析や人物批評だけでは、Shakespeare の創作変容期に当たるこの作品を解明するに充分とは言えない。『終わりよければ』に内在する劇的統一と作品のダイナミズムを探る為には「物語」の深層に存在する「語り」としての劇的アクションを追う必要がある。その視点として本論では「病いと治療」という対立項を設定する。

I

ドラマは死のテーマで始まる。

Count. In delivering my son from me, I bury a second husband.

Ber. And I in going, madam, weep o'er my father's death anew; (I.i.1-4)¹⁾

すでに死去した父親の後を継いで Rossillion 伯爵となった若き Bertram が、その後見人である France 王に伺候する為、領地を離れようとするこの場面は死と埋葬のイメージで満たされている。希望に溢れ、前途洋々たるべき若き貴族の旅立に暗き影を落とすこれらの心象は、更に王の病いへの言及によって増幅される。王は“fistula” (I.i.31) という難病を患っており、いかなる碩学の医師達ですら癒すことが不可能だと言うのである。

Bertram の旅立が死で色取られるなら、その目指す目的地である France 王は病いで飾られている。これらの形象でこの劇の基調はほぼ固められたと言えるであろう。

続いて Helena がその第一の独白で、Bertram への愛を観客に告白する。

Hel. I am undone ; there is no living, none,
If Bertram be away ;

.

Th' ambition in my love thus plagues itself :
The hind that would be mated by the lion
Must die for love. 'Twas pretty, though a plague,
To see him every hour ; to sit and draw
His arched brows, his hawking eye, his curls,
In our heart's table - heart too capable
Of every line and trick of his sweet favour.
But now he's gone, and my idolatrous fancy
Must sanctify his relics. (I. i. 82-83, 88-96)

彼女の消極的な姿勢を顕著に示すこの独白は、冒頭以来の死と病いのイメージの中にはめこまれており、従って、この台詞を聞く観客の心中にこれらの心象が暗影を落とすのは必定である。しかもその独白自体の内容も、“undone” や “no living” といった言葉によって死の形象が敷衍され、更に88・90行と二度にわたって繰り返される “plague” という語の響きが病的な色彩をこの台詞に添え、観客の意識に Helena とその恋の状態が病んでいるという印象を確立する。そして、この様な Helena の状況を収斂するのが、“idolatrous fancy” という語句である。今はすでに他界した貧しい侍医の娘である Helena は、身分の格差を顧みず若き伯爵の Bertram に叶わぬ愛を捧げる。これを略式化すれば以下の様になるであろう。

Helena's idolatrous fancy her low birth
her one-way love

この病んだ状態に自ら治療を施すべく彼女は行動に移って行くわけであり、

その第一歩が France 王の重病を癒すことになるという次第である。

ところで、以前の消極的な Helena が積極的な人物に発展変身するに際しての観客の異和感を排除し、この人物像変化の転回点をなすのが、彼女の第一独白の直後におかれた Parolles との処女性問答である。元より本劇において「処女性」は中心的な主題の一つであり、その先鞭を付けるのが二人の会話なのである。

Parolles は登場と同時にいささか野卑な機知問答を Helena との間に繰り広げる。消極的に処女を守ろうとする後者に対して、前者は自然の法則に従って生産的な方向へ向うよう忠告を与える。この会話で先ず最初に注目されねばならない点は、以前とは打って変わって Helena があたかも、*Much Ado about Nothing* の Beatrice の如く活発に機知の応酬を行なうことであり、これによって彼女がその第二独白で示す積極性は観客に抵抗なく受け入れられる。次に、この時点まで病いから死へと向う破壊的なヴェクトルが、再生から繁殖増加へと流れる建設的な方向性へと 180度の転回を示していることが指摘され得る。これによっていよいよ劇のダイナミズムが始動するわけであり、Helena の第二独白がそれを確定的なものとする。

Hel. Our remedies oft in ourselves do lie,
Which we ascribe to heaven; the fated sky
Gives us free scope;

.....
Impossible be strange attempts to those
That weigh their pains in sense, and do suppose
What hath been cannot be. Who ever strove
To show her merit that did miss her love?
The king's disease- my project may deceive me,
But my intents are fix'd, and will not leave me.

(I. i. 212-14, 220-25)

この台詞に関して G. K. Hunter は次の様に指摘する：“The couplets here

seem designed to raise the sense of inevitability and of supernatural confidence.”²⁾ 超自然的な力に守られた、Helena の確固たる積極性は France 王へ “remedy” を施す方向を指向する。と同時に観客の関心も彼女の王に対する治療に集中されてゆく。この点で「治療」がドラマの原動力として作動を開始する。

一幕二場に舞台が進むと病身の France 王が初めて登場し、Helena の父がもし生存していたならその治療を受けることを希望したであろうと述べる。ここで患者である王の側でも「治療」を受ける意志が表明されたと考えることができ、観客の焦点は二人の出会いの方向に合わされてゆく。

ところで、これらの過程において、先ず Helena 自身の美德が、次いで彼女が父から遺された治療法の超自然的効能が幾度となく強調されてゆく。先ず Helena の美德をすでに十分よく理解している伯爵夫人は、息子との結婚を暗に認め、更に彼女の Paris 行きについて問いただす。彼女は自分の最終目標は王の治療そのものではなく、Bertramであると答える。つまり王の治療は一つの段階にすぎないわけであり、ここで Helena の自己治療＝王の治療という等式が一応成立する。かくして彼女は「老世代」の一人である伯爵夫人から金銭的、精神的支援を受けて、Paris へと向う。

宮廷に到着した Helena は、その美德と超自然的治療法によって老貴族 Lafew に感銘を与え、その共感を勝ち取る。そして遂に開幕以来、観客の焦点が合わされてきた王との対面の場となる。予想通り王は Helena の治療を拒むが、観客は比較的安心して劇の流れに身を委ねることができる。なぜなら今まで再三強調されてきた超自然的治療法が観客の心に浸透しているからであり、また多くの研究者が指摘する「おとぎ話」の枠組の効力も見逃がすことはできないであろう。この場面でも Helena は盛んにその超自然的効能を説く。

Hel. Inspired merit so by breath is barr'd.

It is not so with Him that all things knows

As 'tis with us that square our guess by shows;

But most it is presumption in us when
 The help of heaven we count the act of men.
 Dear sir, to my endeavours give consent ;
 Of heaven, not me, make an experiment. (II. i. 147-53)

彼女の懸命の説得と処女の名誉を賭けての申し出に、王は Helena の美徳と超自然的療法を認めるようになり、彼女の治療を受ける決心をする。ここで彼女は本劇の「老世代」の中心人物である王の援助を受けることに成功し、夫を与えてもらう約束を取りつける。そして、この段階で「老世代」の人々全てが、Helena の側に立つことになったわけである。

奇跡的に王は回復し、いよいよ Helena の婿選びの場となる。しかし、ここでの彼女は拒絶を恐れて消極的な姿を見せており、もはや超自然性の影も形もなく一人の単なる娘になっている。やがて彼女は Bertram を指名するが、彼は彼女の生まれの卑しさを理由に彼女を退け、王の命令を拒否する。そこで王はその理由を無効にする為、Helena に爵位と財産を付与する。

King. 'Tis only title thou disdain'st in her, the which
 I can build up.

.....
 If thou canst like this creature as a maid,
 I can create the rest. Virtue and she
 Is her own dower ; honour and wealth from me.

(II. iii. 117-18, 142-44)

この結果、事実上、彼女の病いの片方— 'low birth' —は癒されたと考えることができる。実際、劇後半では、彼女は従者を従える身分となっており、また彼女の協力者には多額の礼金を約束していることなどもその証拠と考えてよいであろう。かくして王の病いの治療と Helena の病いの部分的治療は内容上一致する。

一方、Bertramの方は、今まで不鮮明な人物像しか与えられていなかった

たが、今回の事件で“Proud, scornful” (II. iii. 151) な悪しき面を暴露したことになる。この様な態度の為、王は遂に激怒し、大権を發して無理矢理 Bertram を承服させてしまう。王の祝婚の辞で第一部は終了する。

II

Helena は名目上 Bertram を夫にすることに成功したが、彼の愛情を勝ち得たわけではない、つまり依然、彼女の病いの状態は続いている。一方、結婚に絶望した Bertram は腹心の部下である Parolles と謀って戦時下の Florence に逃亡し、そこで武勲をたてようとする。更に彼は伯爵家に代々伝わる指輪を彼自身から手に入れ、Helena の胎から彼を父親とする子供を生んだ場合にだけ、彼女を妻と認めるという課題を記した手紙を送り付ける。

Bertram の Florence 行きを知った伯爵夫人は彼を“rash and unbridled boy” (III. ii. 27) と呼んで非難し、一時的にはあるが実子との絶縁を宣言するにまで到る。また、一方では Helena を慰め、彼女の美德を称賛する。ところで伯爵夫人によるこの様な Bertram 非難、Helena 称賛は本劇における「老世代」の対 Bertram 観、対 Helena 観を端的に示すものである。前章で検討した様に「老世代」の人々は全て Helena の美德を誉め称え、彼女に好意を示している。ところが Bertram に対して王はその傲慢さに激怒し、Lafew はその愚かさを見破っている。つまり、彼は Helena とは逆に「老世代」から好意を受けてはいないように設定されている。「老世代」の人々が健全さと良識を代表し、ある程度までコーラス的役割を果すよう仕組まれている点を考えれば、彼等の人物判断は観客の Helena や Bertram に対する感情移入を先導することになる。より単純化して言えば、観客は Helena に同化し、Bertram に対しては異化の方向に導かれる。これが Shakespeare の意図であることは、その粉本の扱いを調べれば直ちに判明する。『終わりよければ』の主要な種本は、William Painter による *The Palace of Pleasure* (1566) に収められた物語“Giletta of Narbona”である

劇の第二部は彼の病いが極まったところで終了し、第三部ではその治療が展開されるが、その前にこの病いを助長し、また、その治療においても劇構成上大きな機能を果たす Parolles について検討しておく。

Parolles は一言で言えば Falstaff を矮小化した人物であり 'miles gloriosus' を代表する一人である。彼は主人の Bertram に対し、その名が暗示する様に “Be more expressive to them [Lords]” (II. i. 51) と忠告する。Bertram はその正体に気付くことなく全き信頼を寄せ、唆しに乗って Helena を捨て Florence へ逃避してしまう。この Parolles の機能を伯爵夫人は端的に指摘する。

Count. A very tainted fellow, and full of wickedness;
 My son corrupts a well-derived nature
 With his inducement. (III. ii. 87-89)

言葉による “inducement” が彼の生命線である。

ところで、この Bertram とは逆に Helena は彼を “a notorious liar”, “a great way fool, solely a coward” (I. i. 98-99) と呼び、最初からその正体を見破っている。Lafew もまた彼の実体を見抜き、一方的に非難し、罵詈雑言を浴びせ掛ける。しかし、奇妙なことに、本来 Helena や Lafew による Parolles への批判は観客の心中に彼の明確な人物像を浮かべさせるはずであるが、劇前半で実際に舞台上に提示される Parolles の行状がそれらを支えるに充分でない、つまり言葉の描写による Parolles の人物像と舞台上の人物との間かなりの乖離が生じているのである。従って観客には一種の不審感が募ってくる。しかし、作者の語りは巧みである。なぜなら、観客はこの不審を解消すべく Parolles の言動に注目するはずであり、その結果作者は彼の正体暴露の場面—Parolles がその本領を最もよく発揮し、しかも Bertram の治療に重要な意味を持つ場—へ観客の視点を集中できるからである。

III

第三部の場面は最終場を除き、ほとんど Florence で展開される。先ず、三幕五場では Bertram 率いる Florence 軍の凱旋を一目見ようと集まった市民達の間で、彼が Diana という娘を口説いていることが報告される。そして、その取持ち役を務めているのは、やはり Parolles である。ところが、その彼の様子がおかしい。

Dia. That jackanapes with scarfs. Why is he melancholy?

Hel. Perchance he's hurt i' th' battle.

Par. Lose our drum! Well!

Mar. He's shrewdly vex'd at something. Look, he has spied us.

Wid. Marry, hang you!

Mar. And your curtsys, for a ring-carrier! (III. v. 85-91)

前章でも分析した様に Parolles の機能は、“inducement”であり、また悪しき“suggestions”(III. v. 17)である。そして、彼のこの病んだ状態を明瞭に表現するのが“ring-carrier”である。Hunter に拠れば、この語は‘bawd’と更には‘deceiver’まで意味するとのことである。³⁾つまり Parolles は Bertram の「邪霊」なのである。その彼が“drum”を失ってしまった。T. W. Baldwin も指摘する様に、この“drum”は Bertram が三幕三場で軍神 Mars に忠誠を誓い、愛を放棄したあの“drum”である。⁴⁾それを Bertram の「邪霊」である Parolles が喪失し、その上、彼の取持ちにより Bertram は Diana に情欲を抱いている。これらの事から Bertram は病いの第一段階から癒されて、第二段階に移項されたことが分かる。

しかし、彼は今なお病んでいる。この段階から Helena との相互愛という完全治癒に到るには多くの困難の存在が予想される。そして、この治療を効果的に行なうには、絶対の権威者であり Helena の完全な支援者である「老世代」の前では是非とも行なわれねばならない。その為に Parolles の正体暴露と bed-trick は必要不可欠な前提条件となる。

Parolles の正体を嗅付けた二人の France 貴族は、Bertram に陣太鼓奪

回に見せ掛けた彼の正体暴露の計画を持ち掛ける。Parolles は案の定この計略にはまり、奪回可能と法螺を吹くが、その見込みは全くなく、自らの舌を呪うばかりである。かくして自己のアイデンティティを否定してしまった Parolles の結末は滑稽かつ哀れなものではない。彼は奇襲され、目隠しをされて陣営へ連行される。そこで彼は助命と引き換えに当の Bertram や France 貴族が顔前にいるとも知らず、彼等に関する有る事、無い事、思いのままにぶちまけてしまう。更に自らの女術の機能を否定するかの如く Diana に宛てた Bertram 警告の手紙を発見されたり、果ては主人を裏切るとさえ誓う。ここでようやく Bertram も彼が “a double-meaning prophesier” (IV. iii. 97) であることに気付く。

この場面は本劇中最も楽しい笑劇的な場であるが、同時に正体が暴かれることで、ペテン師としての Parolles, Bertram の「邪霊」としての Parolles は死ぬ一彼の病んだ状態は癒される一ことになり、一つの象徴的な転機がここに訪れることになる。更に Bradbrook は Parolles の正体露頭が大団円における Bertram のそれを予示するものであることを指摘している。⁵⁾

では次に bed-trick について検討してみたい。三幕五場で Diana とその母である未亡人から偶然 Bertram の Diana への言い寄りを聞いた Helena は、直ぐ様 bed-trick を思い付き、二人に協力を依頼する。彼女は Diana を使って Bertram の求愛を受け入れることと引き換えに、彼から伯爵家に代々伝わる指輪を得させ、彼に時間と場所と条件を告げさせる。そして、Helena は Diana になり代って Bertram と一夜を共にし、その時に Diana に約束させておいた別の指輪を Bertram に与える。この指輪が大団円において Bertram の治療の為に重要な小道具として働く。

ここで Bertram が Diana に譲渡した指輪について考えてみたい。

Ber. It is an honour 'longing to our house,
 Bequeathed down from many ancestors,
 Which were the greatest obloquy i' th' world
 In me to lose. (IV. ii. 42-45)

が Bertram に与えたものであり、しかもそれは王が彼女の為に授けたものであった。指輪の出所を尋ねられた Bertram は、苦し紛れに Florence である女が窓から投げてよこしたものだという嘘をつく。王は激怒して、Bertram を殺人の嫌疑で投獄してしまう。今回は単なる王の怒りだけではなく、それに加えて Helena 殺害の容疑、そして投獄という出来事が彼の心に大きな衝撃を与えているはずである。これが最終治療の第一弾となる。

次に王に請願書が届けられ、それに引き続いて Diana と未亡人が登場する。Diana は結婚を餌に処女の操を奪っておきながら、その約束を未だに履行しないと Bertram を訴えるが、彼は Diana を兵隊相手の卑しい娼婦だと罵る。そこで Diana は例の Rossillion 家の指輪を示して彼に反駁し、更には bed-trick の時に彼女が与えた（と Bertram には信じさせてある）指輪を返すよう要求する。これによって先程の Bertram の言逃れは嘘であることが明らかにされたのである。Bradbrook の指摘に拠れば、偽証の罪は特に Elizabeth 朝の貴族にとって社会的抹殺に等しい。⁸⁾ この治療の第二弾は決定的である。

Bertram の改心には後は Helena の登場を待つだけでよい。指輪の入手先を問われた Diana は謎をかけながら王をじらし、王の不審が頂点に達したところで Helena を導入する。

Dia. Good mother, fetch my bail. Stay, royal sir;
 The jeweller that owes the ring is sent for
 And he shall surety me. But for this lord
 Who hath abus'd me as he knows himself —
 Though yet he never harm'd me — here I quit him.
 He knows himself my bed he hath defil'd;
 And at that time he got his wife with child.
 Dead though she be she feels her young one kick.
 So there's my riddle: one that's dead is quick,
 And now behold the meaning. (V. iii. 289-98)

死んだと誰しもが思っていた人間が生きた姿を現わす、その奇跡が与える

衝撃は Bertram の完全治癒を確実なものとするに十分である。二つの課題を果した Helena は Bertram に尋ねる。

Hel. Will you be mine now you are doubly won?

Ber. If she, my liege, can make me know this clearly

I'll love her dearly, ever, ever dearly. (V. iii. 308-10)

死んだと思われていた人間が甦り、更にその人間が新たな生命を宿す。死と病いの形象で始まったドラマは、見事なコントラストを見せながら二重の生命力によって幕を下ろそうとしている。Bertram から愛の言葉を勝ち得た Helena には、もはや多くを語る必要は残されていない。ここに描かれているのは、“the fine's the crown.” (IV. iv. 35) の世界だからである。

注

- 1) 『終わりよければすべてよし』からの引用は、すべて *The Arden Shakespeare: All's Well That Ends Well*, ed. G. K. Hunter (Methuen, 1959) に拠る。
- 2) Hunter, p. 15n.
- 3) Hunter, p. 87n.
- 4) Hunter, p. 87n.
- 5) M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (Chatto and Windus, 1951), p. 167.
- 6) Hunter, p. 103n.
- 7) Bradbrook, p. 168.
- 8) Bradbrook, p. 163.